②『世界が日本を認める日』カレル・ヴァン・ウォルフレン

比較日本研究会2005年5月8日　レジュメ提出

第一章　日本と日本人が世界から認められるために

イラク参戦は戦後の日本人の信条と正反対の行為

＜戦後日本の平和への熱い思い＞

＊　日本の平和主義：日本人の口癖、

＊　小林正樹監督の「東京裁判」、「日本は世界に平和の大切さを教えるために軍部指導者の有罪判決を受け入れた」

＊　現在も日本の軍隊はイラクに、全く必要のない侵攻に加担

＊　日本政府のよからぬ意図から出た事ではない。じつは、日本政府は自分たちが手を貸しているものが正確にはどういうものなのかを、はっきり理解していない。

＜世界で起こっていることに無関心な日本人＞

＊　日本のことを話題にする時：「肩をすくめる」という表現がもっとも似つかわしい。

＜世界地図から消えつつある日本＞

＊　「日本はほうっておいて中国に目を向けるべきだ」欧米ビジネスマン、大学キャンパスでの会話は日本から中国へ。日本は小さな付属物。

＊　80年代の「産業の怪物」からの信じがたいほどの変化。その決定的理由：45年以降世界外交の舞台で事実上見えない存在であり続けていること。この状況に満足しているもの：官僚：国際的文脈で注目されなくなったことは日本の官僚にとっては都合の良いものである。

＜檻の中に閉じ込められている日本＞

＊　世界が日本に注目しなくなったことは日本の国内状況と対になっている。

＊　極めて重要なことであるにもかかわらずあまり関心が払われていないこと：中国（新しい外交を）、ロシア（関係改善を）北朝鮮（日本の政治的存在感の欠如）外交政策の檻：本書では鉄格子はなんなのかを明らかにする。

＊　今のアメリカは「善」の勢力ではなくなった。これを指摘する新聞雑誌は多いが、この変化はきちんと理解されているだろうか。

＊　対外関係を改善するために、さらには世界をもっとまっとうにするために役立てるにはどうすればよいか。

第二章　なりそこないの帝国の属国でよいのか

＜日本とアメリカは同盟国か？それとも・・・＞

＊　同盟か？同盟は対等平等を基本とする。日本はアメリカの重要な外交プログラムや外交構想を邪魔したことが一度もない。

＊　植民地か？植民地経済は常に宗主国の経済的利益にかなうように運営される。日米関係は明らかにそうではない。日本経済システムは異質。

＜奇妙な属国・日本＞

＊　日本とアメリカはちっとも似てない。中国人の方がアメリカ人に近い。いずれにせよ日本とアメリカはきわめて特殊な関係だが、この性格が捉えにくいのは、それを表す言葉がないためだ。こうした関係は歴史上存在したことがない。

＊「属国」が相応しい名称：真の主権を持たず、外交政策をほぼ完全に支配されている

＜政治的舵取り役の不在＞

＊　世界は国際舞台に日本がいないことを普通の状態とみなすことになった。これは実感としてわかる

＊　日本には普通の意味での政府は存在しない、政治的説明責任の中心の欠如。→日本には事実上政府がない。

＊　国が一人前の国家として認められるかどうかは、まさにその分野—外交政策の決定という分野—にかかっている。個人は頭脳を使って他の個人との関係について考え、自分が達成したい事に合わせて自分の行動を調整する。日本という国にはそうした頭脳がない。

＊　日米関係の決裂という衝撃的な出来事が起きたりしたら、日本は遅まきながらそうした中心の主体を作らざるを得ない。そのような政治的中心がなければ、国際舞台でやっていけないから。このことときちんと理解すること重要。中国問題の本質もここにある

＊　東ドイツ崩壊の時のコール、アルジェリア・クーデター時のドゴール、ベルリンの壁崩壊時のゴルバチョフ。公式の権力保持者たちの集団としての弱点があらわになるのは、即時の断固たる決断が必要な、そうした危機の時。

＊　日本の例、関東軍になんらの手も打てなかった文民内閣、阪神大震災時

の政府対応。

冷戦後の新しい世界が見えていない日本

ウ氏の論議にほとんどすべて同意する。何故最後のところで外交問題に関してウ氏と違いが出てくるのか。国家というものに関する感覚の違いだろう。ウ氏は国家を厳然たる社会単位として捉えるが、私はその国家自体が溶けつつあると感じている。それが決定的な違いだろう。従って日本国憲法第9条の問題もこの延長線上にある。9条は国民国家を否定する。9条についてはTBSでの立花vs宮台対論が採りあげられても良い。立花は護憲、宮台は改憲。立花が「要するに政策的効果の問題だ」という時に、別の言葉で言えば改憲の「損得計算」である。

＜冷戦後の新しい世界が見えていない日本＞

＊　ソ連の崩壊によって日本を取り巻く地政学的現実は劇的に変わった。

＊　北朝鮮は特異な事例：北の敵対姿勢は冷戦の一部ではあったが、現在ではこの敵対姿勢は単独で別個の政治的現実になっている。それは冷戦の遺物ではあるが、それを取り巻いていた冷戦の諸条件はすっかり消滅している。ロシアも変わった。中国も変わった。そしてもっと重要なのがアメリカの外交政策の変化。冷戦の終結こそが大きな現実である。北朝鮮の対決姿勢に惑わされてはならない。米国の予防戦争という驚くべき政策選択もじつは冷戦の終結。

＊　じつは国際勢力のアメリカの性格変化に対する認識は日本では全く希薄。事態の進展きわめて早い→国際的な係わりを避けるための日本のメカニズムは役に立たなくなっている→このままでは日本はアメリカ帝国主義の手先とみなされるようになるだろう。

＜「善意の帝国」という信じがたいネオコンの論理＞

＊　帝国主義という言葉に途方もない変化・・・帝国という言葉に付きまとった負の意味合いを消滅させたネオコン

＜ソ連の消滅がアメリカに及ぼした影響＞

＊　かつての大統領は、他国にどう対処すべきかという決断の際、そこそこまともな決断を下さなければならなかった。

＜アメリカは決して帝国ではない＞

＊　アメリカの文化的覇権は、一見した印象より大きくはない。アメリカの商業文化は他の国々の文化の表層を漂っているだけである。

＜そしてついに失敗した覇権国アメリカ＞

＊　アメリカは縮小しつつある大国。

＊　かつてはアメリカに対する敬意が広く存在。今はほとんど消えうせてい

る。影響力というものはつまるところ、受ける側がどれくらい敬意を払っているかにかかる。

＊「わが国は世界のモラル的存在として行動している」と主張する資格を失った。

＊ 日本は「なりそこないの帝国の属国」で幸せになれるのか。日本の外交の優先事項を見直すことが急務。

第三章　イラクー破壊された世界秩序の象徴

＜ベトナムとイラクを同列に置く誤り＞

＊ ベトナムの場合は脅威の存在と同盟の存在あり。イラクには両方かけている。*同盟の存在こそが戦争に巻き込まれる条件の一つであるという神島の議論のひとつの具体例としてベトナムがある。ウ氏も同盟関係こそが実は戦争に巻き込まれる可能性を増大させるという考え方のようだ。*

＊ 右派の登場はベトナム症候群という要因果大きい。*この指摘はおそらく正しい、政治力学はそのように働くものだろう。日本についていえば、左翼自虐史観の繰り返される否定の論理が「作る会」「救う会」の支持拡大を生み出したひとつの要因であるとウ氏ならば論じるはずである。*

＊ イラクの侵攻＝ナショナリズムに支えられた妄想、政治的ウソ、西洋の傲慢

＜反ブッシュの人々にも支持された侵攻＞

＜国際法がこうむった深刻な打撃＞

＊ ウ氏の世界史観が見て取れる＝国際協調の歴史、漸進的な世界秩序

＜占領が続く限り抵抗は続く＞

＊ オランダ政府の派兵に怒る

＊ NGO国際機関の活動も占領自体を正当化するのに一役買っている。この問題は重要。善意のNGO，活動家はこれをどの様に捉えているか。高藤氏は今なにをしてるか。それについて、ここまで突き詰めて考えているか。民主党はどの様なポジションか。

＊ レジスタンスが世界に通告しているのは国籍や所属機関にかかわらず誰でも標的になるということ

＊ 抵抗はさらに進む、治安は悪化

＜ハッピーエンドはありえない＞

＊ 自衛隊は歴史的観点からも具体的な役割という観点からも茶番

＊ 現時点で有志連合にできるもっともまっとうなことは直ちに撤退するこ

と

＜見事に成功したプロパガンダ＞

＜ドイツと日本を引き合いに出す愚かしさ＞

＊　サダムは戦争を始めなかった

＊　イラクの人々が(日本人やドイツ人と違って)アメリカに恩義を感じる理由は全くない。従って占領統治は全く違ったものになるはずである。

＜日本の動機とオランダの動機＞

オランダ

＊　オランダ国民は戦争を支持してこなかったが、連立政権はアメリカの侵攻が及ぼす広い意味での影響を考慮しないまま参戦を決定した

＊　政治家たちの甘い判断があった。首相は宗教界出身でアメリカの善意を疑わなかった。

＊　当時のオランダ外相がNATOの事務総長になりたがっていた。「情けない」というのが国民の世論調査結果

＜日本＞

＊　湾岸戦争は戦後始めての地政学的騒乱、日本は自国の存在を示す行動をなにもとらなかった

＊　日本の官僚と政府アドバイザーは1990年の失敗を繰り返したくなかった

＊　日本の政府関係者にかけていた洞察：(1) 国連の承認なしの侵攻の結果生まれる次の世界の姿 (2) 今の事態を望ましい方向に持っていく能力がアメリカの現政権にあるか

＊　イラク派遣の決断は問題のありかを慎重に見定めてのものではなかった。

＜国民と政府の断絶＞

＊　一般人が知識人よりはるかに性格に物事を見抜いていると思っている。*この国家の問題をどう考えるか。ウ氏が次に問われるのはこの問題*

＜今なお続くイラクの悲劇＞

第四章　とてつもなく変化した世界と時代遅れの日本

＜時代遅れになっている日本の姿勢＞

＊　日本の政策決定者や理論家の間で論じられていることは今日の世界の現実とずれている

＊　日本は他のアジア諸国の変化に気付いていない。「いつも、結局はだいじょうぶだったのだから、最終的にはうまくいくだろう」という、独り

よがりの心的状態に浸っている

＜現状維持思考が阻む変化への適応＞

＊ 日本にとっての大きな知的挑戦・・・権力保持者にしみついている考え方、アジア諸国の変化

＊ 日本の当局者は未だに冷戦時代から抜け出せない・・・中国・インドの台頭

＊ 新しいアジアに対処するにはどのような戦略的・政治的・外交的土台に立つか

＊ 冷戦の終結は武力でなされたものでなかった・・・*これが原則になっていたようだ。だから今新しい政治学(神島理論の発展深化)が求められている*

＊ ウクライナの選挙は非暴力の手法が機能することを改めて実証している

＊ 平和あるいは平和的解決を望んでいるか否かが政府の良し悪しを判断する基準になっている

＊ 簡単にいえば「アメリカの覇権の終わり」と「世界大国アメリカの縮小の始まり」

＜逆効果の衝撃と恐怖＞

＜世界でもっとも偉大な国の凋落＞

＊ アメリカへの信頼が2003年に崩れた。「予防戦争」に乗り出して、アメリカ自身の伝統的な政治原則を破った。アメリカの安全を危うくしただけだ

＊ 核兵器の拡散が再びグローバルな脅威になってきている。*これは日本のマスコミそのほかではほとんど指摘されていないが重要なポイントだ*

＊ ワシントンは様々な国際機関に対する非公式な支配権を徐々に失ってきている。*この点も日本の国内にいると見えないが確実にある。但しこれはかなり複雑な様相を呈している。一方では確かにアメリカに、以前にもまして気遣いする、国連あるいは国連幹部の動きがある。(アメリカに受けの良い前UNDP総裁マーロック・ブラウンをアナンは事務総長官房長官として起用せざるを得なかった。)しかし、もう一方で、様々な場面で、アメリカ批判を、単にレトリックとしてではなく本気で国際機関の中で展開する国々が増えていることも事実だろう。昨日のニュースで言えば京都外相会議で京都議定書を巡りアメリカ批判があったこと、さらにNY本部での核軍縮会議でエジプトなどが核保有国に対して痛烈な批判を展開しているらしいことなど、米国の相対化が進んでいるように感じられる。*

＊　平時におけるアメリカの軍事力の限界を露呈してしまった
＜時代遅れになっている吉田ドクトリン＞
＊　過去三年で明白になったようにブッシュとネオコンは妄想の世界で生きている
＊　日本は属国の立場を捨て、真の同盟関係を結ぶことができる
＜変化した世界の経済的帰結＞
＊　円ブロックという考え方はかなり馬鹿げたもの
＊　アジアブロックが形成されるためには世界貿易の様相を一変させるような特別な取り決めに日中が参加する必要がある。*この特別な取り決めについてウ氏は詳述はしてないが、それこそ冷戦構造の固定概念を完全に払拭し、アジアの現実を直視し、相談しながら大胆に考え抜くべきだと言いたいのではないか。*
＊　ユーラシアを念頭に置くべき

第五章　日本の外務省—その奇異なる存在

ネーション：歴史や文化的伝統を共有し共通の言語、考えを持つ人々の集まり
ステイト：ネーションは外の世界で自らを代表することができ、なおかつその外の国際社会に存在するルールを認めるときステイトとなる。*ウ氏の言わんとするところは、要するに、一人の人間と同様、「主体性」をネーションが持ったときにステイトとなるということだろう。*
＜対外関係をつかさどる省の凋落＞
＜日本の外務省の奇妙な立場＞
＊　日本の外務省は手足を縛られている。手：東京の官僚　足：アメリカ
＊　今日でも政治的説明責任の有効な中心が欠けていることに山県はもっとも責任がある。統一性ある政府を代表できないという外務省の問題は元をただせば山県に行き着く。*この点については、本書でももう少し論じ、また「権力構造の謎」でも詳しく論じている*
＜外務省の戦後の優先事項＞
＊　外務省の官僚と占領当局のカウンターパートはしばらくするとお互いの安心できる分野を生み出した：世界で自己主張しない日本、アメリカとの関係で現状維持しようとする日本
＊　誰が日本の外交政策を決定しているかを突き止めるための政策の4つのカテゴリー

(1)共産主義国に対しての姿勢(2)韓国・台湾(3)世界の大多数との関係(4)アメリカとの関係

＜外務省との個人的な関係＞

＜何事も現状のままに＞

＊　私の知る限りでは、強力な国が、別の国に全面的な戦略的保護を与えながら、その一方で、その相手国が経済の領域で事項に挑戦するのを許した例は過去にない。

＜いくつもの頭脳を持つ日本という国家＞

＊　国について人間のように語るのであれば、日本は、知的に、もしくは感情的に統合されておらず、自分がどこに向かって進んでいるかわかっていない、ということができる。

＊　真に新しい政策を生み出し、実行することのできる中核が、日本の政治システムに欠けている。

＜日本の首相と外務省の関係＞

＊　本当に首相として機能したのは田中角栄だけ

＊　過去40年、外交政策でもっとも偉大だったのは中曽根：自立したアジア政策。*中曽根に対する高い評価については、本研究会では議論のあるところかもしれない。あの有名な「不沈空母」発言で日米関係をさらに「属国」的に強化したのではないかという議論もありえよう。ウ氏は中曽根を小沢を極めて高く評価する。両者共に明確な「国家」観があるということではないか。ウ氏は日本人に主体性の確立を呼びかけるが、それは国家というキーワードで語られる。さて、わが研究会では、どういう論点が出てくるか？*

＜絶え間ない変化の時代＞

＊　湾岸危機は、政治的説明責任の中心が欠けているとどうなるかという格好の見本

＊　海部の中東訪問取りやめ

＊　エリツインの訪日取りやめ

＜田中真紀子に欠けていたもの＞

＜相次ぐスキャンダル＞

第六章　日本のナショナリズム

＊　日本に必要なのはナショナリストではなく愛国者である

＜ナショナリズムの負の側面＞

＊　アメリカにあるのは愛国心の大いなる復活などでは決してない。アメリカにある熱病を正確に言い表す言葉はナショナリズムである。
＊　ナショナリストは自分の国を思考の中心に置く。イデオロギーである。イデオロギーは疑問視されない。イデオロギーの守護者が疑念を抱くものを打ち倒す。
＊　一種の病理。心理的機能障害
＊　独立を手にしていない人々が奉じるナショナリズムと、独立している国民が抱くナショナリズム。それは手段型と表現型*(英語を調べること)*
＊　日本が真の独立を達成するためにナショナリズムが必要とされているのではないか？しかしこれは全く違う。日本に必要なのは現実的な政治。場違いな日本のナショナリズムは、この国を真の独立に寄与しない

＜愛国心こそが必要なもの＞

＊　愛国者は自分の国を広い視野で眺めることができる。たいてい国際的視野を持つ。自国の悪行を誇大に言いたてることも成熟の証でない。
＊　ナショナリズムと愛国心をはっきり認識され一般の議論でふたつの言葉が正しく使われればそれは日本の国際的立場にとってすばらしい

＜まだ消化されていない日本の過去＞

＊　自虐史観と反自虐史観の否定

＜吉田ドクトリン後の愛国心＞

＊　アメリカの保護は完全に机上のもの
＊　ナショナリストだらけのアメリカ政府は日本に対するどのような直接的脅威にも立ち向かってくれない
＊　軍事でない、もう一方の外交イニシアテブが環境変化に対して緊急に必要なこと

第6章のキーワードはもちろんナショナリズムと愛国主義であるが。Patriotism の日本語として愛国主義が本当に適当であるかどうか。これがまず問題になる。日本語では愛国主義は限りなくナショナリズムに吸収される。愛郷主義・愛郷心こそが日本語として相応しい言葉であると主張し、かつ、その愛郷には国家も含まれると強力に論ずる中で、問題となっている主体性の欠如、そして強固な檻としての「国家」を打ち破るという、この両面におけるブレークスルーの扉を開けることができるのではないか。

第七章　手ごわい隣国—歴史の新しい段階に入った東北アジア

＜日本のもっとも厄介な隣国＞

＊　北朝鮮の体制も、全ての体制と同じく、「生き延びたい」と思っている
＊　北が欲しいのは不可侵条約
＊　北は、「核爆弾の脅威」に絶えずさらされてきた、ただひとつの国：米軍の核搭載ミサイルはピョンヤンに向いている
＊　北の脅威という文脈でアメリカは日本をより安全にしてはいない。北の望みを正当と認めず挑発的な行動をとることで日本をより危険にしてきた。
＊　アメリカはむしろトラブルメーカー
＊　北の脅威があるから日本はアメリカにくっついていかざるをえないというのは、じつは真に自立した日本の政策について考えなくて済むよう、一種の「逃げ」として持ち出されている説明なのではないか。

＜歴史的チャンスを逃しそうな日本＞
＊　ぬくぬくとしたここちよさがまずい
＊　「予防戦争は認められない」と宣言すること

第八章　EU －日本の権力者が発見していない巨大勢力

＜まだ発見されていないEUの重要性＞
＊　EU、それは、国家でもない、連邦でもない、同盟でもない、帝国でもない、全く新しい政治的現象
＊　事の重大さが加盟国の国民にも理解されていない

第九章　世界は日本を待っているーユーラシアの挑戦

＜互いに反対方向を見ている日本とヨーロッパ＞
＊　ユーラシアの両端では、アメリカとそっくり同じ資本主義が実践されているわけでもないにもかかわらず、それでも経済ニュースは主としてアメリカの分析に由来する用語で報じられている。

＜アメリカフィルターの威力＞
＊　ノンフィクションに関しては圧倒的にアメリカ出版社

＜日本経済についての世界の間違ったイメージ＞
＊　過去10年の状況を不況と呼ぶのは誤り。
＊　アメリカの高官たちは世界第二位の経済大国に対して、英米型の資本主義より近いシステムに変えれば、日本はもっと繁栄すると大真面目に30年以上にわたって説き続けてきた。

＊　ユーラシア人は反米主義者になってはならない。アメリカはいつかブッシュ政権を突き動かしている過激なナショナリズムを追い払うはずだ。

＜学問的理論によるまやかし＞

＊　広く流布している国際関係理論は過去の世界に基づくもの。———バランス・オブ・パワー。*この点については私は「近代西洋政治学の罠」（神島二郎追悼記念論文集）で論じている。もちろんこれを論じる際にウルフレンを意識していたわけでない。逆に今回このウ氏の最新著書で私と同じ見方が示されていることで、改めて同志？を、また一人発見して元気がでたというところである。*

＊　この理論が見逃しているもの・・・国民の啓蒙、友好的な感情、アセアンの協力から生まれている外交的安心感。

＜アメリカのパワーの衰退＞

＊　パワーは相手の心理に作用するもの。暴力を用いることは往々にしてパワーを低下させる。

＊　ヨーロッパやアジアの人々は、アメリカがやや前近代的な様相を呈していることに気付いている。

＊　政府と国民の間が完全に反民主的になっている

＊　世界の現実を理解していない：地雷禁止、京都議定書、国際刑事裁判所、包括的核実験

＊　ドルの下落。過去三年でユーロに対して35％、円に対して24％

＊　好感をもたれる立場で、（つまりアメリカの懐に飛び込んだ上で）、日本の意見を伝える、という立場は間違い。ブラックホールに吸い込まれるだけ。トニー・ブレアーでさえできない。

＜まっとうな「諸国家の社会」＞

＊　インターナショナル・コミュニテはない。ソサイテイ・オブ・ステートがある。

＊　「諸国家の社会」は世界政府を生み出せないが、（あらゆる「社会」がそうであるように）長期的な、物質的利益を超えたものがあることに気づくようになっている。

＜まず国連を守ることからはじめよう＞

＊　日本が目標にすべきこと：国連を守ること

＊　アラブや中南米では国連、IMF、世銀、UNDPはアメリカの手先として切って捨てられる。ワシントンは国連がワシントンの思うことを、十分やっていないと思っている

＊　イラク安保理決議反対はじつは国連を守った。シラク、シュレーダー、

プーチンはそれを理解していた。

＊ 国連は戦争を防止したり搾取を阻止したりはできない。和らげることができる

＊ 日本ができること：総会の強化、日本の外交官がヨーロッパ、インド、中国、ブラジルと行動を起こしたら世界を驚嘆させる。日本は再び重要な国となる。逆の場合、世界の仕組みの中で、日本がスミに追いやられる危険性ある

読後の全体的感想

「ウォルフレンをもっと、そしてウォルフレンの先へ」

1 私の頭は整理された。混沌としていたものに言葉を与えられた感じだ。ウ氏の議論の面白いところは、ジャーナリストらしく現実に密着しつつ、しかし彼の思考のプロセスをかなりしつこく開示し、結果的に思想の領域に限りなく近づいている点だと思う。彼の議論に飽きが来ないのはその思考のプロセスがかなり立体的だからだと思う。平面的な「なんとか事情」の解説でないところが「わが友」としたい理由だろう。

2 ＜ウ氏の日本論について＞

『日本権力構造の謎』で解き明かされた＜中枢の欠如している日本＞の問題はいっこうに解決されていない。今回の中国・韓国との問題、JR西日本の事故問題をみるにつけ、いよいよ日本の中枢欠如が具体的な形で大きな社会的損失をもたらしてきていると痛感する。ウ氏はすでに「過去の日本論者」と見られているふしはあるが、もう一度、氏の日本論を通読し、世間に再び、強力に紹介する価値があるのではないかと、昨今の事態を見ながら考える。朝日の友人(原学)は、先月オランダにいるウ氏に電話インタビューし、記事をアサヒ・イブニングに載せているが、同僚から「いまさらウォルフレンでもないだろう」と訝しがられたという。今こそもう一度ウォルフレンなのではないかと、私は考える。

3 ＜ウ氏の観る国際状況＞

『ブッシュ・世界を壊した権力の真実』に続く、ウ氏の世界政治問題に関する分析・主張の書としてこの本はある。『世界を壊した・・・』で論じられていることと本書の内容は相当オーバーラップしている。特にアメリカの変貌とその将来に関しては、もちろん『世界を壊した・・・』

で詳しく論じられている。ともあれ、ウ氏の観る国際関係・国際情勢分析のほとんど全てについて、私は立場を同じくする。私の中で漠然としていた問題意識に明快な言説を与えられた点も多い。要するに冷戦崩壊後の世界は「諸国家の社会」にならなければならないし、そこに必然があるのだが、大国アメリカはそれを理解せず、日本もまた無意識的に追随している。今、日本もギアー・チェンジしないと日本もとんでもない迷路に入り込むが、逆にもし大胆にギアー・チェンジすれば大きな称賛を世界から受けるはずだという。彼の分析と主張に基本的に同意する。

4　＜神島ならばなんというだろうか＞

東京新聞に連載された神島晩年の「転換期日本を読む」シリーズのうち第4回「混迷に対処する道」の中で神島はこういう「そのような状況に対処するにはどうしたらよいか。主体の自己認識、これである。外的状況がどうであろうと、これに立ち向かう主体それ自身の姿勢がまず問題だからである。」主体の自己認識を主体の自己確立といいかえれば、これは限りなくウ氏の日本への視点・主張と重なる。政・官・業の癒着構造問題の鋭い指摘とあわせ、神島もまた、ウ氏を一定程度「友」とする理由であろう。問題はその先である。主体の自己認識の中心には第二次大戦の敗戦が、神島にとってはあり、それは突き進めて考察すれば、近代国民国家の論理そのものの超克なしにはなしえない作業なのだが、ウ氏にその視点はない。「力の論理」が国際社会での「力」を失いつつあるという認識をウ氏は示すが、そして国家を超えるEUのような動きに対し大きな希望を託すが、やはり神島のようにラジカル(根源的)に議論が進まないのは、やはり第二次大戦の意味する問題についてどこまで根源的に考え抜くか否か、その問題ではないだろうか。従ってその後の、現在と将来に対する処方箋の描き方に大きな差が出てくる。ウ氏はリベラルな「普通の国家」論者である。神島はその先を見つめる。私もまた神島同様その先を見つめる。

5　それにしても、ウ氏の現状に対する現実と思想の間を行き来する、いわば弁証法的な思考のプロセスは重要ではないかと思う。我々もそうした論じ方を、もっともっと肉体化しなければならないと思う。凡百の日本論を越えてウ氏を対話を進めなければならないと改めて感じた。それが「もっとウォルフレンを」という意味である。しかしウ氏を友としつつも、・・・・

いわば<おまけ>としての、もう一冊のウルフレンの著作の要約

ブッシュ・『世界を壊した権力の真実』(George Bush and the destruction of world order)からのいくつかの引用、ポイント

＊抽象概念を相手に戦争をしたのでは勝利することはありえない。戦争に勝つためには、いずれは降伏させて講和条約を結ばせることのできる相手が必要である。

＊世界的と称された出来事が、たいてい数ヶ月のしないうちに忘れ去られる。しかし、2001年秋に「世界が変わった」と何度も繰り返された時、それは決して誇張ではなかった。

＊それが崩壊した教訓から導かれるのは、軍事力は望ましい未来を保障してくれないということだ。ソ連は軍事力はまだ無傷で残っていたにもかかわらず消滅したのである。

＊アメリカが20世紀に少なくとも二度、世界の政治文明を救ったことに疑問の余地はない。一度目はヒットラーを打ち破り、日本のアジア支配を終わらせた時。二度目はソ連の拡張主義を首尾よく食い止めた時。

＊ここに来てアメリカは以前と同じアのアメリカなのかという問いが大きく浮上してきた。

＊世界テロに立ち向かう国際社会の努力を主導してゆこうとするなら、ワシントンは、パリやロンドンや、ニューデリーのあるいは東京やベルリンの考えを無視することはできないはずだ。

＊メディアの主流の政治評論からは、立体的な見方がすっかり姿を消した。アメリカがあれほど誇っていた言論の自由が、実質的には存在しなくなったのだ。